上町台地界隈の情報紙

うえまち

揮毫 一心寺 長老 高口恭行 師

2021年5・6月号
号外 2021 5

発行：NPO 法人 まち・すまいづくり
発行人：竹村伍郎
TEL&FAX.06-6779-7222
http://www.machi-sumai.com/
uemachi@machi-sumai.com
〒543-0043
大阪市天王寺区勝山1-11-29

四天王寺 新縁起

二〇二一年 聖徳太子一四〇〇年御聖忌記念

第23回

中世以前の天王寺舞楽

四天王寺 勧学部
文化財係主任・学芸員
一本崇之

何事も、辺土は賤しく、
かたくなれども、
天王寺の舞楽のみ都に恥ぢず

吉田兼好『徒然草』
第二百二十段

四天王寺の舞楽は、四天王寺に仕えた楽人によって脈々と伝承されてきたものです。舞楽を演奏する楽人集団を「楽所（がくそ）」といい、宮中の大内楽所、主に興福寺で演奏する南都楽所、そして四天王寺の天王寺楽所が、「三方楽所」として公武の奏楽を担ってきました。

舞楽における「舞」は、誰でも好きなものを舞えるわけではなく、曲によって専門的に継承する家が決まっており、父子相伝の形で伝えられてきました。例えば、天王寺であれば林・岡・薗・東儀の四家がこれに当たります。雅楽ミュージシャンの東儀秀樹さんは、まさに天王寺楽人の末裔なのです。

さて、天王寺舞楽を象徴する舞に「採桑老（さいそうろう）」があります。もとは大内楽所に伝えられていましたが、康和2（1100）年に、唯一の「採桑老」継承者であった多資忠（おおのすけただ）が殺害されてしまい、京での相伝が一度断絶した曲でした。しかし、この事件に先立って四天王寺に下向していた、多好茂（おおのよしもち）によって天王寺楽人の秦公信（はたのきみのぶ）に伝授され、その子公貞（きんさだ）へと引き継がれていたのです。

元永元（1118）年3月3日、宇治・平等院の一切経会に出仕した公貞が、この「採桑老」を舞い、纏頭（てんとう／褒美）を受けています。天王寺楽人の技能の高さがうかがわれる逸話です。そして、大内楽所での「採桑老」断絶を憂いた白河上皇の命によって、天王寺の公貞が資忠の子・近方にあらためて伝授し、宮中での「採桑老」が復活したのでした。

大内・南都の楽人は下級武官として舞楽を家業とする人々でしたが、一方で天王寺楽所の楽人は、四天王寺という一寺院に仕える身分でした。このため、寺に隷属する意味の「散所楽人」とも呼ばれ、大内・南都の楽人からは差別されていたといいます。天養元（1144）年には、ある大内楽所の楽人が、天王寺の楽人と同座したという理由で、大内楽所を追放されるという事件が起こるほどでした。

しかし、技と伝統は都の人々も一目置く存在でありました。冒頭の『徒然草』の一文はそれを端的にあらわしています。天正期（16世紀末）頃には、その技量が認められ、他楽所とともに宮中の奏楽に携わっていたと推測されています。

さらに天王寺楽所の楽人は、各地の中小寺院の舞楽法要に招かれて舞楽を披露するとともに、現地の若者に舞楽を伝授し、その流布にも寄与しました。広島・厳島神社をはじめ、山形・慈恩寺、静岡・山名神社など、現在も各地に天王寺楽人より相伝した舞楽に由来する舞楽芸能が伝承されています。

舞楽「採桑老」（平成26年篝の舞楽）

相羽秋夫の 上町らくご植物園

植物が登場する落語を取り上げ、演芸評論家の相羽さんならではの面白い視点で読み解きます。

第24折

東京落語「青菜」
株にあらず―蕪（かぶ）

仕事を終えた植木職人に、その家の主人が「お酒でも」と声を掛ける。鯉の洗いをはじめ数々の料理が出た後「青菜はどやね？」とすすめられる。しかし奥さんが、菜が切れていることを「名（菜）も九郎（喰う）判官」と合図を送ると主人「義経（よしとけ）」と返す。このやりとりの真相を知った職人、帰宅するや妻に同じ段どりを教え、友人に試す。すると妻が「名も九郎判官義経」とやってしまったので、職人窮して「うーん弁慶」。

青菜とは、青色の菜の総称で、具体的には鈴菜（蕪）・冬菜（唐菜）・油菜などを指す。そこで、今回はこの中から〝蕪〟のご紹介である。蕪菁と表記することもある。カブラ・カブラナ・カブナ・スズナなど呼び方は多い。もともと根が丸いので、形の似ている鈴の菜の意味でスズナと称する。「春の七草」の一つに数えられる。また、かぶらを女房詞（ことば）でオカブと呼ぶ。そのオが取れてカブになった。

地中海沿岸から西アジア一帯が原産地だという。日本に伝わり、千葉や埼玉などで生産されるが、聖護院・天王寺・近江などの旧称で関西でも広く栽培されている。「上賀茂や土塀の中の蕪畑」と詠まれているように、京都の聖護院かぶらの栽培法が垣間見れる。酸茎（すぐき）菜や日野菜・野沢菜も同種という。そういえば酸茎漬けも京都の名産である。

料理法としては、漬物（聖護院かぶらをうすく切り、塩漬けや酢漬けにした京都名物が千枚漬）や煮物にするが、なんと言っても「蕪蒸し」が絶品である。甘鯛のような白身魚の上におろした蕪を乗せて蒸す料理だ。高級料亭の一品として人気がある。「有り合はす柚子味噌恃みて蕪蒸」の句があるように、本来はどこの家庭でも作っていた。しかし「大鍋に煮くづれ甘きかぶらかな」と、家庭では煮物の方がよく似合う。

江戸期の俳人与謝蕪村（よさぶそん）は、摂津の国（大阪府）の農家の出身だ。きっと実家が蕪を作っていたのではないだろうか。

―「蕪」と掛けて漫才師の口癖と解く、その心は青菜（アホな）。

NPO法人「まち・すまいづくり」活動報告

住まいと暮らしの無料相談会

5月8日（土）・6月12日（土）
各10時～12時

大事なことなのだけど、なかなか日常生活では相談できない住まいと暮らしの「困った！」はありませんか？

住まいと暮らしの無料相談会には当法人会員の弁護士、司法書士、税理士、宅地建物取引士、一級建築士といった専門家が出席。専門知識を生かしご相談に応じます。

場所：大阪市立社会福祉センター（大阪市天王寺区東高津12-10）
予約・お問い合わせ：NPO法人「まち・すまいづくり」（06・6779・7222）

「上町台地名所百景」発売

「うえまち」15周年記念企画「上町台地名所百景」を上製の地図にしました。定価は400円（税込）で、大阪歴史博物館のミュージアムショップで販売しています。お問い合わせは右記・NPO法人「まち・すまいづくり」まで。

WEB「うえまち」

現在、休刊中の上町台地界隈の情報紙「うえまち」ですが、本号外のほか、WEB上でも情報発信を行っています。

①note（ノート）を使った記事の掲載

4月より新連載「『上町台地』名所図会」がスタート。大阪歴史博物館の大澤研一館長のインタビューも掲載しています。

②フェースブックを使った情報発信

フェースブック上で「うえまち編集局」「うえまち台地界隈情報」を運営。

上町台地界隈の情報紙

うえまち

揮毫 一心寺 長老 高口恭行 師

2021年5·6月号
号外 2021 6

発行：NPO 法人 まち・すまいづくり
発行人：竹村伍郎
TEL&FAX.06-6779-7222
http://www.machi-sumai.com/
uemachi@machi-sumai.com
〒543-0043
大阪市天王寺区勝山1-11-29

二〇二一年 聖徳太子一四〇〇年御聖忌記念

四天王寺

新縁起

第24回

天正四年の兵火

四天王寺 勧学部
文化財係主任・学芸員
一本崇之

四天王寺は、中世から近世への過渡期に、大きな兵火を2度経験しています。その最初が、天正4（1576）年のいわゆる石山合戦に伴う兵火です。戦国時代、最大の宗教的武装勢力を誇った本願寺と、それに危機感をもった織田信長との軍事的・政治的な衝突でした。

天文元（1532）年、細川晴元によって山科本願寺を焼き払われ、行き場を失った本願寺は、かつて蓮如の隠居先であった大坂御坊（石山御坊）に拠点を移し、大坂本願寺（「石山本願寺」は後世の呼称とされます）を構えました。のちに、この本願寺跡地には大坂城が築かれるように、交通の要所として、また軍事的要所として最適の立地でした。

すでに織田勢と2度にわたる合戦を繰り広げていた本願寺でしたが、天正4年、毛利輝元や上杉謙信と和議を結び、信長を包囲する体制が整うと、3度目の挙兵をします。

対する信長は、本願寺を取り囲むように野田（福島区）、森河内（東大阪市）、そして天王寺に砦を築き、戦に備えました。天王寺砦は現在の天王寺区民センターのすぐ北側、生玉寺町の月江寺の場所になります（写真）。ここを本陣とし、佐久間信栄と明智光秀がひかえていました。一方で本願寺勢も、楼岸砦（中央区石町）や木津（西成区出城）に砦を築き対抗します。

5月3日、織田勢が木津砦を攻めると、1万の軍勢をもって織田軍を破り、勢いそのままに天王寺砦にせまりました。天王寺砦の光秀軍は、本願寺勢の猛攻により窮地に陥ります。光秀より援軍の要請を受けた信長は、急ごしらえで兵を募り、7日には信長自ら3千の兵を伴って、1万の本願寺勢に突撃し、これを撃破しました（天王寺合戦）。しかし、この5月3日の戦でまさに戦場となった四天王寺は、ことごとく伽藍を焼かれてしまったのです。

この時、寺を焼いたのは本願寺・織田いずれの側であったかという議論があります。

四天王寺の史料では信長軍が伽藍に放火したとの記述が散見されますが、全体的にはむしろ本願寺勢による放火を示す史料の方が多くみられるようです。例えば醍醐寺・義演の『義演准后日記』には、「一向衆徒が堂塔を残らず焼き払った」と記録されており、史料の客観的な評価では本願寺の軍勢によって焼かれたと考えられています。

いずれにせよ、この兵火により、鎌倉時代に高名な絵師尊智が描いた絵堂「聖徳太子絵伝」をはじめ、各堂宇の仏像・仏具や平安時代以来の舞楽装束などが一瞬にして失われました。中世末期の四天王寺は大きな転換の時期をむかえることになるのです。

相羽秋夫の

上町らくご植物園

植物が登場する落語を取り上げ、演芸評論家の相羽さんならではの面白い視点で読み解きます。

第25折

上方落語「桃太郎」

神通力―桃

昔の子どもは親の昔咄（ばなし）を聞いている内に寝入った。だが現代の子はそうはいかない。今宵も父親が「桃太郎」の咄を始めるが、反対にこの咄の新解釈を始める。「一人の男が、鬼のような世間に、きびの団子に代表される粗食に耐え、智（猿）・仁（犬）・勇（雉＝きじ）の3つの徳を積んで立ち向う、という人生訓が、この物語には込められている」と話す。それを聞いていた親は、いつしか寝入る。それを見て子ども「この頃の親は罪がない」。

「陰陽五行説」では、鬼の棲む西方に当たる果物が桃であるところから、鬼退治をする人物の名を桃太郎と名づけた。また同じ五行説で西に当たる干支はサル・トリ・イヌなので、桃太郎のお伴にこの3匹の動物が当てられた。それにしても、この落語の智仁勇説も説得力がある。

「桃太郎」異話には、拾ってきた桃を食べた爺婆（じじばば）が、急に若返って産んだ子が桃太郎というストーリーもある。桃は厄除けの効果があると信じられた。また、頭痛・しびれ・消化・血行などに効くとされ、病魔を倒すシンボルに考えられていたことも、「桃太郎」の命名につながったのだろう。

現在のような形と味の桃は、明治以降に中国から移入された。日本原産のものは、小振りで頭が尖（とが）っていた。味も李（すもも）のようだったことから、「李も桃も桃の内」という早口言葉が出来たのであろうか。

「春の苑（その）紅（くれない）にほふ桃の花下照る道に出で立つをとめ」と万葉集で詠まれた。この場合は、食べる桃よりも観賞用の「花桃」の意が強い。与謝蕪村は、「喰ふて寝て牛にならばや桃の花」と、桃の花蔭で飲食をし転（うた）た寝をして過ごそう、例え牛のように太ってもいいじゃないかと開き直る句を遺した。

一つの事に集中できない「桃尻」や「桃色遊戯」にふける人を見ると、「驚き桃の木山椒の木」になる。

―「桃」と掛けて若鮎のような若者と解く、その心はピーチピチ。

大人のための文章教室

ライター・編集者 松本正行

"ぼかし言葉"はやめましょう

その件については、問題がないというふうに私は思っています。

国会の場で責任を追及された大臣が思わず口にした、そんな言葉ですね。もちろん「いうふうに」は不要。これなど典型的なぼかし言葉で、脚本家・内館牧子氏の『カネを積まれても使いたくない日本語』という本にも入っていました。他にも最近よく目につくぼかし言葉に、「～みたいな」「～のような感じ」「～のほう」があります。「お席のほう、ご案内します」などは耳にしない日がないくらいです。

その件については、問題がないと私は思っています。

前回紹介した「結果がわかり次第、ご報告したいと考えます」の「考える」や「思う」もぼかし言葉の一種で避けるべきです。一方、「私はAだと思う」はOKですが、「私はAだとは思う」と書くと、なんだかはぐらかされた気がします。

ぼかした言葉が氾濫するのは摩擦を避ける心理が働いているから、という説もあるようです。しかし、そうであっても、明解でなければ自分の考えは正しく伝わらない――注意しましょう。

※本連載は「うえまち号外」掲載分以外も、Webでご覧いただけます（「ノート うえまち」で検索）。

上町台地にある高津高校のOB。1000を超える取材経験をもち雑誌、webを中心に活動中。NPO法人「まち・すまいづくり」会員。